

幼児の描画発達における一考察

— 幼児の描画発達と睡眠—覚醒リズムとの関連性—

倉原 弘子

A Study of the Stages of Development of Drawing Skills in Infants — The Relation between the Stages of Development of Drawing and the Rhythm of Sleep and Awakening in Infants —

Hiroko Kurahara

(2016年11月25日受理)

I はじめに

幼児の造形表現の目的は、遊びを通して学び、自らを発達させ、人間形成をすることにある。人間は生まれてから、見るものすべてに興味を持ち、視覚、触覚、聴覚、嗅覚、味覚といった五感を全て用い、感じ、手を動かし、道具を握り、それらを用いて紙にペンで点を打つなど描画の最初の段階へと導かれる。「0歳児から絵を描く」と記述している著書もあり、0歳児から造形表現の兆候が見られると言っても過言ではなかろう。幼児に関してかく活動、つくる活動においておおよその発達段階、区切りとなる年齢が定義されているが、幼児を取り巻く環境も目まぐるしく変化する現代において、何か変化は見られないのであろうか。この点に関して、以下、郷間英世、大谷多加志、大久保純一郎が行った研究において、興味深い結果が出ている。

これまでの検討の結果、現代の子どもは20年前に比べて、1) 発達が促進している項目に比べて、発達の遅延している項目が多い、すなわち現代の子どもは20年前の子どもに比べて発達が遅くなってきていること 2) その発達の遅れは幼児期前半から始まり、幼児期後半から著名になること 3) 遅れの内容では特に「描画」で顕著であり、「正方形模写」で約6か月、「三角形模写」では約8ヶ月、「菱形模写」にいたっては約1年遅れてきていること、などを報告してきた。^[1]

上述したように、図形描写において現代の子どもの描画発達段階は20年前よりも遅延しているという結果が出

ている。では、なぜ幼児の描画発達が遅延しているのか。女性の社会進出、家族の多様化等による子どもの生活リズムの変化が何らかの影響を与えているのではないだろうか。幼児の描画の発達段階、その特性を再確認すると共に、子どもの生活リズムとの関係性、今回は睡眠時間が描画発達に及ぼす影響について調べてみたい。それが本研究報告の目的である。

II 幼児の描画発達段階

さて、本章において、幼児の描画発達段階の詳細を見ていくこととしよう。幼児の絵画表現発達段階研究においてハーバート・リードやローウェンフェルド等が著名ではあるが、本研究では、日本の幼児に着目し、花篤實・岡田愨吾編著『新造形表現 理論・実践編』の「かく活動の発達段階」を基に述べていくこととする。花篤らは、日本の保育園の子どもたちの作品を基に、半年ごとの特徴を述べており、外国の研究よりも移行が少し早くなっている。

1 幼児の描画発達段階 (年齢別)^[2]

1歳前後

1歳以前の乳児は、何でも口に入れて確認したが。そのため、画材としてマーカーを与えても口の中に入れてしまう。その段階を経て、その物を理解し、その物と友達になり、1歳前後では、マーカーを手にして画用紙の上に線遊びを始める。この行為は人として自然なものであり、人間が始める最初の絵画的表出活動である。この頃の線は偶発的で左右の動きが多いが、描いた本人はその行為と描いた線を楽しんでいるのである。

別刷請求先：倉原弘子，中村学園大学教育学部，〒814-0198，福岡市城南区別府 5-7-1

E-mail：gohirona@nakamura-u.ac.jp

[1] 郷間英世，大谷多加志，大久保純一郎，2008年，「現代の子どもの描画発達の遅れについての検討」，『教育実践総合センター研究紀要 (17)』，pp.67-68

[2] 花篤實，岡田愨吾，2009年，『新造形表現 理論・実践編』，三見書房，pp.32-34，参照 (図1～11，上掲書，pp.32-34)

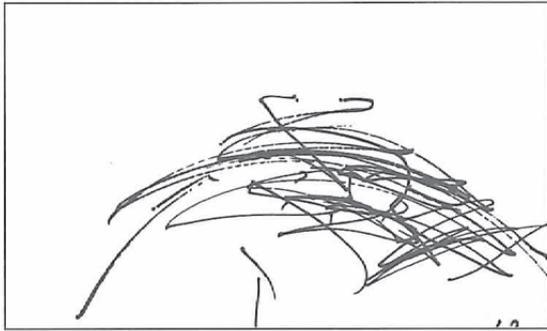


図1 1歳前後

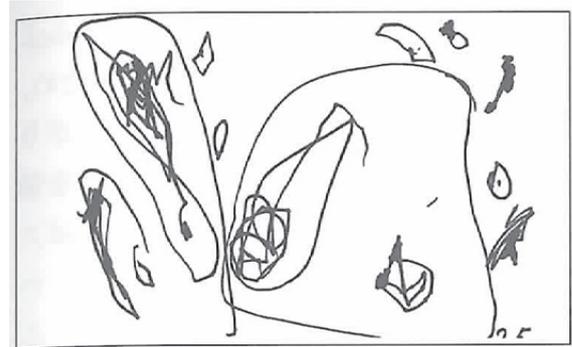


図4 2歳半前後

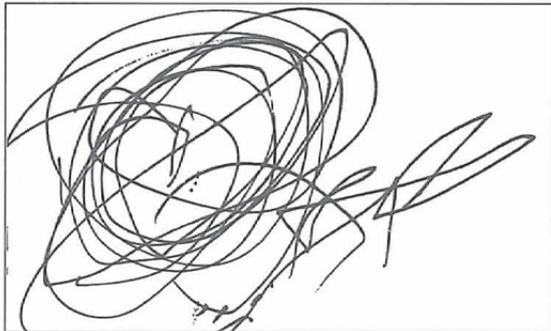


図2 1歳半前後

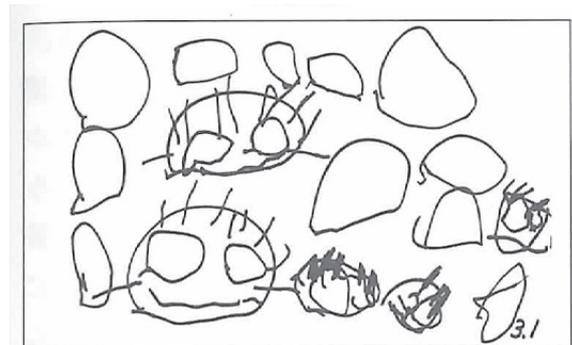


図5 3歳前後



図3 2歳前後

1歳半前後

肩や肘が自由に動かせるようになるにつれ、左右の水平的な折れ線に上下の折れ線が加わり、やがて渦巻き形の円運動となる。1歳前後では描けなかった円が描けるということは、肩や肘を伴った身体的な発達によると考えられる。この渦巻き形の円運動をスクリブルや「なぐり描き」と呼ぶが、この時期の幼児にとっては、これこそが表現である。花篤らが「画用紙の空間に円運動をする姿には、積極的な生きざまが感じられる。」と述べているように、幼児が自分なりの生きざまを表現していると言える。そして、描く経験を積むことで、自己対話や運動のコントロール能力が身についていく。

2歳前後

これまで、円運動を伴った線遊びで自己表出をしていたが、2歳前後では、円形の線あそびの中に大小の終結した線の円も描くようになる。「これはね、くるま」「これは、お母さん」などと説明をするようになり、単なる線あそびではなく、描いた円に命名し、意味づけをする。頭の中のイメージをまだ形にはできないが、円形らしいものを描くことで伝えようとする。

2歳半前後

運動機能、言語能力が発達すると同時に、徐々に終結した円形が描けるようになり、描いたものをひとつひとつ説明し、意味づけを行う。空間への認識もかなり発達し、大小の円をかき並べたり、大きい円の中に小さな円を描いたりする。また、様々な形の線を描いたり、一般的には線が終結した円形を描いていく。

3歳前後

運動機能の発達により、手先がコントロールできるようになり、きれいな円形を描けるようになる。短い水平線や垂直線も描けるようになり、3歳を過ぎると顔らしい人物表現をする。しかし、個人差がある。これまでの表出活動から、人物を描いて思いを外に伝達する自己表現となっていく。



図6 3歳半前後

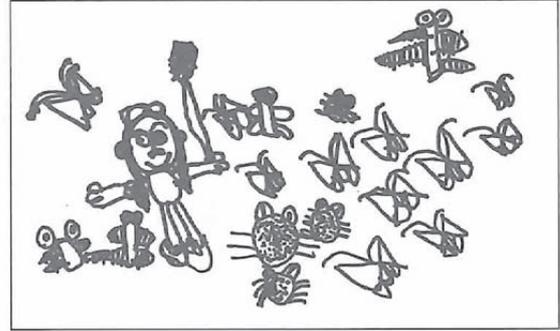


図9 5歳前後



図7 4歳前後



図10 5歳半前後

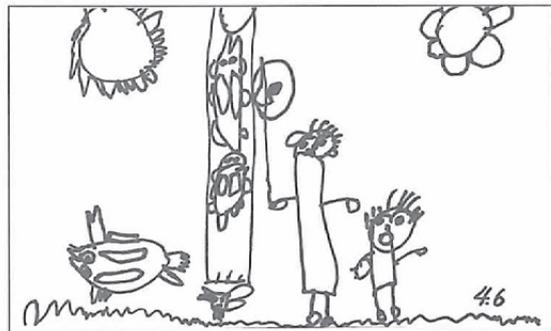


図8 4歳半前後

3歳半前後

簡単な形態を表現の意図を持って描くようになる。見たものをそっくりそのまま描くのは異なり、生活の中で知ったものを素直に描く。象徴的な思考の発達により、実物の形態描写ではなく、象徴的な表現をする。そして知的発達によって、人物表現において、目・耳・手・足など左右対称に表現するなど知っていることを描く。3歳を過ぎると、頭から手、足が生えた「頭足人」と呼ばれる人物表現も見られる。

4歳前後

空間や形態への認識が一層深まり、直観的思考力の発達に伴い、表現の内容もより豊かになる。デフォルメされた表現も見られ、直観的で自分なりの捉え方をする。

人物表現としては胴体を描くようになる。動物を描く際は、人間の顔のような擬人化（アニミズム）された表現をすることがこの時期の特徴である。

4歳半前後

自分の知っているものをかき分けられることができるようになり、ものごとを分類する能力が発達する。しかし、空間への認識が不十分で、配列には関連性があまりなく、対象物に関しては、感情的・興味的であり、自分の知っていることを強調して表現する。太陽や花などに目や口を描く。これは、アニミズムの傾向であり、幼児特有の表現として大切にすべきである。

5歳前後

自分の知覚や感覚の発達により、まだ完璧とは言えないが、対象に近い形、気分にあった色をある程度考えて使うようになる。想像の世界を表現することを楽しみ、想像力はますます豊かになっていく。また、対象の特徴や装飾的なものを描き加えたり、自分の思いを自由に楽しんで描く。人物表現では、手足を2本線で表現する。

5歳半前後

これまで羅列的な表現であったが、ものとの相互の関係が把握できるようになり、自分とものとの関係性を意識できるようになる。そのため、説明要素の多い表現とな

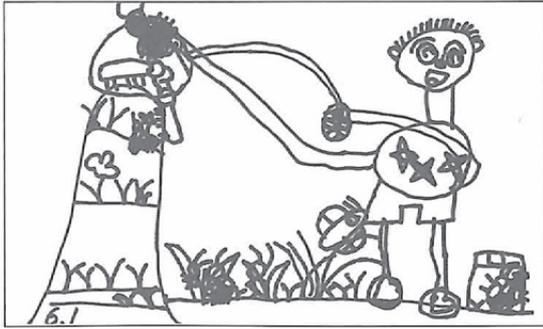


図11 6歳前後

り、空間認識の発達により、画用紙の下部に土や草を描き、画用紙の上部には雲や太陽を描く。人物表現においては、目・鼻・指など詳しく描くようになる。

6歳前後

画用紙の下部に一本の線（基底線）が現れ、基底線上に自分の思いを描く。積み上げ遠近から透視遠近へと構図が変化する子どももいる。また、画面中央に描いたテーブルや運動会の時のトラックの線も基底線となり、基底線に沿って人物などを描く。人物の動きでは対象物にとどくまで手を長く描くなど、合理性も表現しようとする。

III 幼児の発達の特性^[3]

幼児の発達には、遺伝的要素や環境要因による経験の相違等によって、個人差が生じることは言うまでもないが、そのような幼児の発達の特性について、ここで紹介する。

1 一定の順序性

幼児の描画活動の最初の段階は、「点・線あそび」から始まるが、徐々に「何々を描こう」といった意図を持った線描きになり、図式的な表現をする。このように発達には、順序性があり、花篤・岡田が述べているように、一般に「一定の順序で起こってることが多く、特に幼児期においては、次の発達段階が予想されるほど発達の順序は固定的」であるとされる。

つまり、幼児の描画活動は、一般的に第Ⅱ章で述べた描画活動の発達段階の順序で進むことが予想される。

2 発達の連続的過程

人間の成長発達過程は、上述したように順序性があるのと同時に連続的であり、現在の発達段階が次の発達段階に影響を及ぼし、自然と連続的に発達していく。ある段階を省いて、次の段階に急に発達することは不自然な

ことである。

3 発達の分化と統合

発達は、分化と統合を継続しながら、造形活動と密接につながっている。つまり、未分化で全体的であった体の構造や機能が、徐々に各部に分かれ、それらが別々の働きをしたり、相互に関連し、調整される中で、高度な働きができるようになり、その発達が造形活動にも多大な影響を与える。幼児の造形活動は、最初は幼稚な動作から始まるが、成長発達するにつれて複雑な動作による造形活動になるのである。

4 発達の相関性

心身の各部分は、それぞれが独自の成長発達をするが、互いに関連し合って発達しており、発達には相関性がある。つまり、「身体的発達・言語発達・知的発達・情緒の発達・社会性の発達」などと相互に、密接に関連し合っている。そして、もし知的障害があるとすれば、他の部分に何らかの影響を及ぼすことになる。

5 発達の個人差

これまで述べてきたように、発達には順序性があるが、幼児全員が同じスピードで発達する訳ではなく、個人差がある。個人差には、その個人の遺伝的要素と環境要因による違いが大きく影響することは言うまでもない。保育にあたっては、個人差の生じる要因を把握し、的確な援助ができるよう配慮しなくてはならない。さらに、その個人差を加味しながら、成長してもこの順序性に乗り取った描画活動の一般的な変化が生じない幼児に関しては、何らかの障害の可能性も考えるべきである。

6 素質と環境の相互作用

花篤・岡田は、幼児の発達は成熟と学習（経験による素質の変容）の2つの要因が働いているとしている。そして、環境条件（物的環境・人的環境）が悪ければ、いかに素晴らしい素質を持った幼児であったとしても素質を伸ばすことはできず、反対にいかにも素晴らしい環境条件であったとしても、子どもの素質の格差により、学習の効果は異なる。

7 心理的な退行の可能性

正常な状態であれば、素質と環境の相互作用により、一般的な発達段階を経ることができるとは、何らかの原因で精神的な退行現象が見られる場合もある。その原因としては、母親の入院、下の子の誕生などが挙げられる。

[3] 花篤實，岡田愨吾，上掲書，pp.28-29，参照

花篤・岡田によれば、愛情不足になり情緒に不安が生じたときなど絵が乱暴になった事例があり、強くしかられたりして情緒不安が起これば、一時的に4歳であってもなぐり描きをする場合があるとしている。原因は明らかではないものの、一般的に精神の発達がつまづくと、固着した発達段階に退行すると考えられている。

IV 現代における幼児の描画発達の遅れと原因

さて、これまで幼児の発達段階とその特性について述べてきたが、現代、幼児の描画発達の遅れが懸念されている。それに関して、本章で述べていく。

1 図形模写を主とした描画能力の遅延

郷間英世、大谷多加志、大久保純一郎は、1980年の公刊の後1983年に増補された「新版K式発達検査」（以下「新K式1983」と略）及び2002年に公刊された「新版K式発達検査2001」（以下「新K式2001」と略）の標準化のために収集された資料を基に、現代の子どもの発達の特徴、そのアンバランスやゆがみについて検討している。郷間らは「現代の子どもの描画発達の遅れについての検討」の「1. はじめに」において、上述した彼らが行ったこれまでの検討の結果、現代の子どもは20年前に比べて、「発達が促進している項目に比べて、発達の遅延している項目が多い」ことから、すなわち現代の子どもは20年前の子どもに比べて発達が遅くなっているとしている。そして、その発達の遅れは幼児期前半から始まり、幼児期後半から著名になり、遅れの内容では特に「描画」で顕著であり、「正方形模写」で約6か月、「三角形模写」では約8ヶ月、「菱形模写」にいたっては約1年遅れてきていると述べている。^[4]そこで、郷間らは、遅れが著明であった「描画」の項目に焦点をしばり、年齢別通過率などの資料を基に発達の遅延について再検討をしている。彼らはその方法を以下のように述べている。

「新K式1983」および「新K式2001」の標準化に用いられた資料のうち、描画に関する項目の、1) 項目別の年齢別通過率、2) 各項目の50%通過年齢および75%通過年齢の値、3) 項目別男女別通過率、について「新K式1983」と「新K式2001」で比較検討した。描画に関する項目とは、「なぐり描き例後」「なぐり描き例前」「円錯画 模倣」「横線模倣」「縦線模倣」「円模写」「十字模写 例前」「十字模写 例後」「正方形模写」「三角形模写」「菱形模写」の計11項目である。

「新K式1983」の標準化の被験者は0歳以上13歳までの1562人、「新K式2001」の被験者は0歳～成人までの2677人で、そのうち描画の検査項目に関連のある8ヶ月以上13歳未満の人数は、「新K式1983」で1209人、「新K式2001」で1789人である。^[5]

そして、郷間らは、上述した方法で検討した結果、描画の発達についての考察を下記のように述べている。

「新K式1983」および「新K式2001」の描画11項目に関する、項目別の年齢別通過率と50%および75%通過率を比較した結果、「なぐり描き」や「円錯画」など幼児期前半の課題の項目ではそれほど差を認めなかったのに対し、「正方形模写」「三角形模写」「菱形模写」など幼児期後半以後の課題の項目で、「新K式1983」に比べて「新K式2001」で年齢別通過率も50%および75%通過年齢も遅れが著明であった。またその遅れは、年齢別通過率の立ち上がりの年齢、途中の増加、100%に達する年齢など、いずれも遅れていた。このことから、近年の幼児の描画能力の遅れは、特定の子どもたちの問題ではなく、幼児期後半の子ども全体の描画発達の獲得が遅れてきていることが示唆された。^[6]

また、郷間らは、今回の検討で男児で女兒より描画発達が遅れている傾向が見られたが、今回の検討では対象人数が少なかつたため、現在対象人数を増やして検討中であるとしており、断言するまでには至っていない。しかし、これまで述べてきたように、現代（本論文は2008年3月に掲載されたものである）の幼児の図形模写を主とした描画能力は以前と比較して劣ってきていることが明らかにされたと言えよう。郷間らは、これらの結果を受け、以下のようにまとめている。

本検討の結果、最近の幼児の図形模写を主とした描画能力が、以前に比べて劣ってきていることが明らかになった。これは、最近の保育園や幼稚園で保育者によって語られる、「最近の子どもは以前に比べて絵がかけなくなった」という意見と一致しているものと思われる。また、同様に「絵がかけない子どもは、行動の問題や社会性の問題を持っている子どもに多い」という声もよく聞かれる。^[7]

[4] 郷間英世、大谷多加志、大久保純一郎、前掲書、pp. 67-68、参照

[5] 郷間英世、大谷多加志、大久保純一郎、上掲書、p. 68

[6] 郷間英世、大谷多加志、大久保純一郎、上掲書、p. 70

[7] 郷間英世、大谷多加志、大久保純一郎、上掲書、p. 70

これまで述べてきたように、最近の子どもの描画発達
の遅れは明確なようである。上述した「絵がかけない子
どもは、行動の問題や社会性の問題を持っている子ども
に多い」という記述を見ると発達障害児を思い浮かべて
しまうかもしれないが、「本研究の対象者は、軽度の発達
障害児を含んでいる可能性はあるがほとんどは健常児」
であると郷間らは述べている。

2 子どもの描画発達に影響を及ぼす原因

子どもの描画発達に影響を及ぼす原因として、様々な
要因が考えられるが、今回は幼児の睡眠時間に着目して
見ていくこととする。

2-1 幼児の睡眠時間

鈴木みゆき、野村芳子、瀬川昌也は、睡眠一覚醒リズ
ムが不整な1歳児が、保育の場で情動面での発達を懸念
されてることから、「5歳児の睡眠一覚醒リズムと三角形
模写」において、斜線構成が可能になる5歳児を対象と
して、睡眠一覚醒リズムの実態を把握し、三角形の模写
との関連を考察している。その研究方法とは、関東・中
部13ヶ所の公私立幼稚園・保育所の5歳児クラスに在籍
する52ヶ月から72ヶ月までの358名に対し、2週間
(2002年5～6月)の睡眠表を家庭で記録してもらい、
同時期、保育活動の中で幼児達に三角形の模写をさせ回
収、その後日々の保育活動における幼児の様子について
保育者と面談調査を行うというものであった。そして、
三角形模写のチェックポイントとして、斜線2本以上あ
ること、角が認識・表現されていること、図形が3本の
線で囲まれていることが挙げられている。^[8] このように
鈴木は、2001～2003年1歳児～5歳児を対象とした睡
眠一覚醒リズムの調査を行い、それらを基に『保護者も
いっしょ 生活リズム改善ガイド』を発行している。その
著書において、鈴木は、一都一府二十二県の1249名の保
育者(幼稚園教諭・保育士)の約8割が「今の子どもは
睡眠不足」と感じているとした上で、以下のように調査
結果を述べている。

幼児の睡眠に関する保育の場の認識

- ・ 全国1200名余の保育者(幼稚園教諭・保育士)の約
8割が「今の子どもは睡眠不足」と感じ、「朝体温が
低く活動にのれない」「朝ボーッとしている」「無表
情」「リズムを伴う遊びが稚拙」等と相関がみられ
た。(鈴木 2000)
- ・ 1歳児～5歳児の睡眠一覚醒リズムの調査からわ

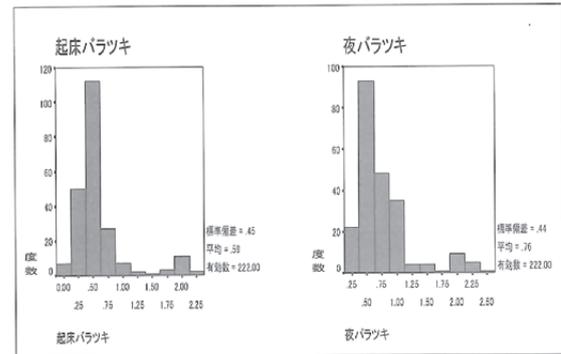


図12 起床時刻・就眠時刻がバラツク！ 鈴木(2002)

かったこと(鈴木 2001～2003)

- 1) 午睡から起こされる幼児には、睡眠一覚醒リズム
(就眠時刻・起床時刻)が不整な場合が多い。
- 2) 就眠時刻が不整な子どもは本人の意思に任され寝
ている割合が高い。
- 3) 睡眠一覚醒リズムが不整な子どもは、保育者が「気
になる子ども」と思っている割合が高い。
- 4) 保育者が「気になる」不整な子どものエピソード
をKJ法で分類すると以下になる。
 - ①ボーッととしていて午前中の活動にのれない
 - ②無表情で自分の気持ちを表しにくい
 - ③理由のない攻撃性を示す
 - ④特定のものにこだわり、他(ひと)に無関心^[9]

上述したように、睡眠一覚醒リズムが不整な幼児には、
日中の活動において、様々な問題点があることが伺える。

上の図は、鈴木が2002年に5歳児の調査をしたもの
で、2週間の睡眠記録において、平均して起床時刻のズ
レが約30分、中には、もう一山、約2時間ズレている幼
児がいたとしている。この調査の際、5歳児に三角形模
写を行わせたところ、222名のうち奇麗に描けたのが184
名であり、描けなかった幼児が38名という結果であつた
としている。そして、その調査で「睡眠一覚醒リズムが
できていた幼児188名、できていなかった幼児が34名で
あり、三角形が描けた184名のうち165名は睡眠一覚醒
リズムが規則正しい幼児であった」と述べている。この
点において、睡眠一覚醒リズムの不整が描画発達に及ぼ
す影響が伺える。また、斜線構成力は4歳半から5歳児
にかけて発達するとしている。以下、参考として、三角
形が描けた例と描けなかった例の図を掲載しておく。^[10]

上述した鈴木らの考察にあるように、睡眠一覚醒リズ
ムの乱れが描画発達に影響を及ぼす可能性は十分にある
と考えられる。そして、IV章「1図形模写を主とした描

[8] 鈴木みゆき、野村芳子、瀬川昌也、2003年、「5歳児の睡眠一覚醒リズムと三角形模写」、『日本小児保健学会講演集』, p.616 参照

[9] 鈴木みゆき、2006年、『保護者もいっしょ 生活リズム改善ガイド』, ひかりのくに株式会社, p.8

[10] 鈴木みゆき、上掲書, p.9 参照 (図12～14, 上掲書, p.9)

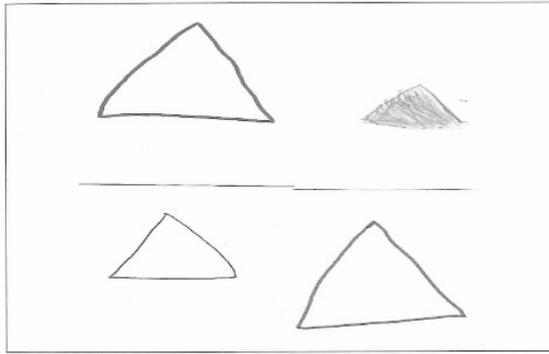


図13 三角形 (描けた例)

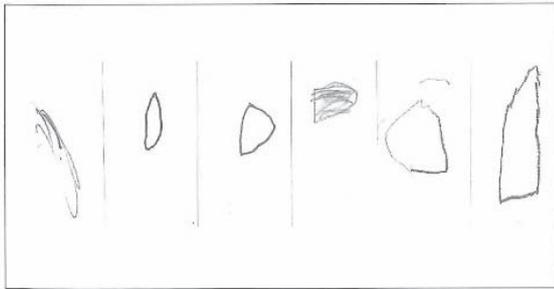


図14 三角形 (描けなかった例)

画能力の遅延」で述べた郷間らの研究考察の「絵がかけない子どもは、行動の問題や社会性の問題を持っている子どもに多い」という記述と、鈴木保育者(幼稚園教諭、保育士)が「気になる」睡眠-覚醒リズムの不整な子どものエピソード「①ボーっとしていて午前中の活動にのれない②無表情で自分の気持ちを表しにくい③理由のない攻撃性を示す④特定のものにこだわり、他(ひと)に無関心」は関連性があるのではなかろうか。幼児の就眠・起床・夜間睡眠量のバラツキが結果として「行動の問題や社会性の問題」を引き起こしている可能性もないとは言いきれないだろう。ゲゼルは、「睡眠障害の多くは、おそらくは、子どもが作るよりも、大人が作りだしたものである」^[11]と述べており、幼児の生活リズムを作るには大人の関わり方が大きく影響すると言っても過言ではない。しかし、家族の形態が多様化する現代において、女性の社会進出など様々な状況や、その環境の影響を受け、乳児期に、睡眠-覚醒リズムをきちんと作っていくことが難しい家庭も存在することは揺るぎない事実である。

V まとめ

これまで述べてきたように、幼児は誰もが一般的な発

達段階を辿ることは明確な事実であり、発達の特質として、①一定の順序性、②連続性、③文化と統合、④発達の相関性、⑤個人差、⑥素質と環境の相互作用、⑦心理的な退行があることが分かった。さらにIV章で述べてきたように、現代の幼児の描画発達には遅れが見られ、その原因として幼児の睡眠時間(睡眠-覚醒リズム)が影響することが分かった。幼児の睡眠-覚醒リズムのバラツキを引き起こすのは大人の関わり方に要因があるが、そこには女性の社会進出、核家族の増加などによる家族の多様化が少なからず影響していると考えられよう。現在は、「妊娠=退職」ではなく、子育てをしながら自分が希望する仕事をし、自分で生き方を選択できる時代であると感じる。では、その各個人の人生の選択を尊重しながら、幼児の生活リズムを整えるためにはどうすればいいのか。鈴木みゆきは、「乳児期に、睡眠-覚醒リズムをきちんと作っていくことが難しい家庭がある。保育は、生活リズム形成に重要な役割を担っている。^[12]」とも述べており、「保育の場でどうすべきか」について、以下のように提言している。

生活リズム改善への提言^[13]

- 1) 睡眠に関する科学的根拠をきちんと説明できる「場」をつくること→認識・知識・意識
- 2) 養育者が幼少時代どうだったかを思い出させる→気づき
- 3) 2週間の睡眠記録をつけてもらう。そのことを保育者と話し合う→事実の認識・意識
- 4) 改善への具体的提言と繰り返しサポート→実践

上述したような流れで、保育者(幼稚園教諭・保育士)が保護者と話す機会を設けるのも効果的ではないかと考える。「早寝早起き朝ごはん」がなぜ大切なのか、保育者自身も説明できるようになっておくべきであろう。そして、鈴木は「何から始めて良いかわからない場合の参考事項」として、以下のように述べている。

早起きから始めよう^[14]

- ・朝、カーテンをあけ、陽の光を浴びる
- ・朝ごはんをよく噛んで食べる
- ・昼間、よく運動する
- ・午睡は午後3時ころには切り上げる
- ・夜9時以降のテレビ、ビデオの視聴やゲームをするのはやめよう

[11] A.ゲゼル, F.L.イルグ, L.B.エイムズ, J.L.ローデル, 2000年, 『乳幼児の発達と指導』, 家政教育社, p.254, 参照

[12] 鈴木みゆき, 野村芳子, 瀬川昌也, 「5歳児の睡眠-覚醒リズムと三角形模写」, p.617 参照

[13] 鈴木みゆき, 前掲書, p.14

[14] 鈴木みゆき, 上掲書, p.15

- ・寝る前のお約束ごと（就眠儀式・眠り小物…）
- ・暗い部屋でゆっくり眠る

上述したように、「早起き」から始めることで、自然と「早寝」に繋がるのではなかろうか。鈴木は、保育者（幼稚園教諭・保育士）が保護者と話し合い、どれか一つをクラス目標にして取り組むことも提案しており、日ごろから心掛けることができるような効果的な取り組みを行う必要性を感じる。このような項目を保護者と共有することで、保護者自身も子どもの生活習慣に関心を持ち、取り組むきっかけになるだろう。IV章で鈴木が「就眠時刻が不整な子どもは本人の意思に任され寝ている割合が高い」とも述べている点からも、保護者が毎日同じ時間に就眠するよう意識づける、添い寝をするなど、保護者の自発的な取り組みも必要不可欠である。

つまり、幼稚園教諭、保育士を目指す学生達に対して、一般的な描画の発達段階のみを教えるのではなく、様々な要因から発達が遅れる可能性もあることも伝えるべきであろう。その際、どのように対応すべきなのか、考える機会も設けるべきではなかろうか。そして、環境要因、個々の素質といった様々な要因によって発達段階には個人差が出ることを理解させ、花篤・岡田が「乳幼児の作品は、全く自由にしておいた場合と保育園などで経験を積み重ねた場合ではかなりの差が出る。^[15]」、「(前略)有効な造形表現活動の体験をさせようとするれば、個人の成長発達に即した環境を用意し、個に応じた援助を行うように心がける必要がある。^[16]」と述べているように、援助する側が個々の幼児の発達段階を理解し、その子にあった援助をすることが重要である。

これまで述べてきたように、幼児の造形活動にとって有効な環境を用意し、発達の個人差を理解した上で、幼児一人一人に合わせて、臨機応変に援助していく必要がある。本研究報告は、既存する研究結果をまとめたものに過ぎないが、発達段階の遅れの原因を裏付けする研究の存在を調査することも本研究報告の目的である。幼児に関する研究は多岐にわたり、調査すべき内容は多分に存在すると考える。そして本研究報告を発端とし、幼児の描画・造形活動について今後も研究を継続していきたい。

[15] 花篤實, 岡田愨吾, 前掲書, p.32

[16] 花篤實, 岡田愨吾, 上掲書, p.28